

令和4年度上大久保中学校だより

上中だより

第3号

令和4年6月1日(水)発行

学校教育目標

「温かい学校 感動あふれる学校」

さいたま市立上大久保中学校

〒338-0824 さいたま市桜区上大久保861-1 TEL855-3901

<https://kamiokubo-j.saitama-city.ed.jp>

自助・共助・公助

けんもつ ゆきひこ
校長 監物 幸彦

5月は連休があり、授業日数が19日と少なかったのですが、離任式・引き渡し訓練・中間テスト・PTA総会・生徒総会・3年修学旅行と行事が目白押しで、4月以上に慌ただしく過ぎ去って行きました。6月も学校総合体育大会や全校三者面談が控えており、祝日が唯一無い6月ということで、一層慌ただしくなりそうです。

さて、5月10日(火)に引き渡し訓練を実施しました。お迎えにご協力いただきました保護者の皆様、ありがとうございました。引き渡し訓練を行うたびに思い出すことがありますので、今回はそれについて書いてみたいと思います。今から11年前の2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災と言われる三陸沖を震源とする大きな地震がありました。その時、私は市内某中学校の5F音楽室で、授業を行っていました。大きな揺れに、驚き戸惑いながらも、生徒たちを机の下に避難姿勢をとらせ、揺れが収まったのちにグラウンドに移動させました。この時の震度は、さいたま市でも震度5強を記録し、経験したことのないくらい長く激しい縦揺れで、音楽室のグラウンドピアノが真ん中から壁にぶつかるまで動いたくらいでした。授業は打ち切りとなり、部活動も中止として生徒たちは下校をしました。ところが、何人かの生徒が学校に戻ってきました。事情を聞くと「東京の会社に勤めている両親が、電車が止まり帰ってこられない。電話をしてもつながらない。どうしていいかわからない。」ということでした。その他にも、「停電で、マンションのエレベーターが止まってしまった。」「水道が止まってしまった。」「信号機が消えている。」など不安になって、学校に戻ってきたとのことでした。そうしているうちに、学校の体育館には、電車が止まって帰宅できなくなってしまった人たちが集まり対応に追われました。東北地方で実際に大きな被害に遭われた方のことを思えば、何ともちっぽけな話ですが、この時ほど避難訓練の重要性を感じたことはありませんでした。

この東日本大震災をきっかけに、日本中で、「いざという時にどうしたらよいか」を真剣に考えるようになりました。引き渡し訓練も、この時から全国的に行われるようになりました。また、「自助・共助・公助」という言葉が頻繁に使われたのもこの時からです。

地震などの自然災害が起きた時に、まずしなくてはならないことが「自助」です。これは、「自分を助ける」「自分の命を守る」という意味です。避難訓練などで、まず机の下にもぐって自分の身を守る行動をとります、これが「自助」です。そして、自分の命が守れたことを確認できたら、次は「共助」をします。「共に助け合う」という意味ですが、自分の周りにいる人の様子を見て、「大丈夫?」「ここには危ないから逃げましょう!」と声をかけ、手をさしのべることを「共助」といいます。そして、そうやって近くの避難所に身を寄せた後に、「公助」といわれる、消防や救急隊員、市役所の方々が助けに来てくださいます。もちろん、市役所や消防の方々はすぐにでも助けに行きたいのですが、同時に何万の人を助けることはできません。ですから、どうしても時間がかかってしまいますので、その公助が届く間での間は、「自助」や「共助」で命を守っていかなくてはならないのです。

しかし、簡単に「自分の命は自分で守れ(自助)」といいますが、東日本大震災では、次のようなことが起こっています。

『あの日、中学の卒業式が終わり、家に帰ると大きな地震が起きました。逃げようとしたときには、すでに地鳴りのような音と共に津波が一瞬にして私たち家族5人を飲み込みました。しばらく津波に流された後、私は運良く瓦礫の山の上に流れ着きました。その時、足下から私の名前を呼ぶ声が聞こえ、かき分けて見てみると、釘や木が刺さり足は折れ、変わり果てた母の姿がありました。右足が挟まって抜けず、瓦礫をよけようと頑張りましたが、私1人にはどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母のことを助けたいけれど、ここに居たら私も流されて死んでしまう。「行かないで」という母に私は「ありがとう、大好きだよ」と伝え、近くにあった小学校へと泳いで渡り一夜を明かしました。そんな体験から今日で4年。あつという間で、そして、とても長い4年間でした。家族を想って泣いた日は数え切れないほどあつたし、15歳だった私には受け入れられないような悲しみがたくさんありました。全てが今もまだ夢のようです。』

これは、東日本大震災追悼復興祈念式における宮城県遺族代表の方のスピーチの一節です。自分の命を守る代償としては、あまりにも過酷で想像を絶する出来事です。ぜひ、ご家庭でも、大きな災害に見舞われたときの行動について話題にしてみてください、上記の内容を考える材料のひとつとしていただければ幸いです。

最後に、東日本大震災の1週間後に実施された、ある中学校の卒業式での代表生徒の言葉を紹介します。「自然の猛威」を「新型コロナウイルスの猛威」に置き換えて読んでみてください。

『自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、わたくしたちから大切なものを、容赦なく奪って行きました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、共に助け合って生きていく事が、これからの、わたしたちの使命です。』